

## 大聖院：不動明王像

不動明王(サンスクリット語でアチャラ)は、5人の仏教の知恵の王様の一人であり、真言仏教の中心的な神です。彼は信心深い人を守り、親の激しい愛情で信者を導くと信じられています。彼は通常怒りの表情で表現され、右手に剣を、左手にしめ縄を振りかざし、鬼その他仏教の敵に対して怒りを解き放たんとしています。仏教。この知恵の王の像は多くの場合、炎の光背と頑丈な岩の土台を伴っており、不動明王の強い意志を表していると言われています(フドウは「不動、動かない」の意味)。この神の起源は初期のインド仏教にまでさかのぼることができますが、不動明王は日本で特に尊敬を集め、多くの寺院で本尊として祀られています。このことは大聖院でも同様です。

重要文化財に指定された大聖院の不動明王像は、10世紀後半にまでさかのぼると考えられています。一点のヒノキ材から彫られたこの彫刻は高さ約1メートルで、張り詰めた集中状態にいるかのように目を大きく見開き、下唇を噛む知恵王が表現されています。彼が持つ長くまっすぐな剣は、元の輝く状態に復元されています。燃えるようなオレンジ色の背景は複製ですが、光背と土台は元の状態です。

この像はその表情と外観により、京都の東寺に収蔵されている非常によく似た像をモデルにものと考えられています。東寺の「不動明王」839年に彫られたもので、国宝に指定されています。この説は、大聖院の像が元々大聖院の属する真言宗御室派の総本山である京都の仁和寺の所有であったという事実により裏付けられています。ここには1920年に移転したばかりで、弥山の大日堂で拝観されたのち、霊宝館に収蔵され現在に至っています。